

心に刻み込まれた正義

—乳児は弱者を助ける正義の味方を肯定する—

概要

弱者を強者から守る行為は、一般的には「正義」の行為として捉えられ、ヒト社会では賞賛の対象となります。実際、これらの行為は社会に浸透しており、古くは神話に、現代では本や映画などでもよく見受けられます。しかし、ヒトはいつ頃からこうした正義の行為を肯定し始めるのか、その起源についてはわかっていませんでした。

教育学研究科の鹿子木康弘 特定助教, Butler 特別研究員, 明和政子 教授らの研究グループ^{*}は、前言語期のヒト乳児を対象に、6つの実験から、弱者を助ける正義の行為を肯定する傾向が発達の早期にすでに認められることを明らかにしました。我々の心には、「強きを挫き、弱きを助ける」という正義の感覚が刻み込まれているのかもしれない。

この研究成果は、2017年1月31日（日本時間 31日 01:00）発行（ロンドン時間 30日 16:00, アメリカ東部時間 30日 11:00）の「*Nature Human Behaviour*」にオンライン版で掲載されました。

※ その他の共同研究者：井上康之 特任研究員（東京大学）、松田剛 助教（京都府立医大）、開一夫 教授（東京大学）

1. 背景

ヒト社会では、攻撃されている他者のために身を投げ出して助けるような行為は「美德」として受けとめられ、道徳、正義、ヒロイズムといった概念とむすびつけてイメージされます。これまでの研究では、正義の行為がみられるのは就学前頃であることが示されてきました。しかし、こうした正義の概念は、生後の学習によって獲得されるのか、あるいは生後早期からすでにみられる傾向であるかについては未解明のままでした。

我々の研究グループは、上述の正義の概念の原型は、発達の早期にすでに認められると仮定し、次のような実験を行いました。

2. 研究手法・成果

まず、6ヶ月児を対象に、攻撃されている弱者を助ける第三者、つまり正義の味方を選好するかどうかの検証を行いました（実験1）。具体的には、水色の丸いエージェント（動作主）が黄色の丸いエージェントを攻撃する場面を目撃した四角いエージェント（緑またはオレンジ）が、丸いエージェントの間に入って攻撃を防ぐ映像と、防がない映像を乳児に交互に提示しました（図1a）。その後、実物の四角いエージェントを乳児の目の前に提示し、乳児がどちらのエージェントの人形に手を伸ばすか（選好）を調べました。その結果、6ヶ月児は攻撃を止めるエージェントをより多く選択しました。続く実験では、攻撃相互作用が目のない無生物になった場面（図1b, 実験2）や攻撃的ではなく中立的な相互作用になった場面（図1c, 実験3）を乳児に提示しましたが、これらの場面ではどちらかのエージェントに対する選好はみられませんでした。つまり、乳児は、攻撃的な相互作用を止める場合においてのみ、第三者の介入行為をポジティブに評価したのです。

さらに、実験 4 と 5 では、乳児が第三者の介入行為を、「正義の行為」として認識していることが確かめられ（詳細は記者レクでお話しします）ました。実験 6 では、行為の意図を考慮して正義の行為の評価を行う能力は、生後 6～10 ヶ月の間に発達することを明らかにしました。

これら一連の結果は、ヒトは生後早期から、攻撃者、犠牲者、正義の味方の関係性を理解し、正義の味方のような行為を肯定する傾向をもつことを示しています。正義の行為を理解し、肯定する傾向は、学習の結果というよりも、ヒトに生来的に備わっている性質である可能性が高いのです。

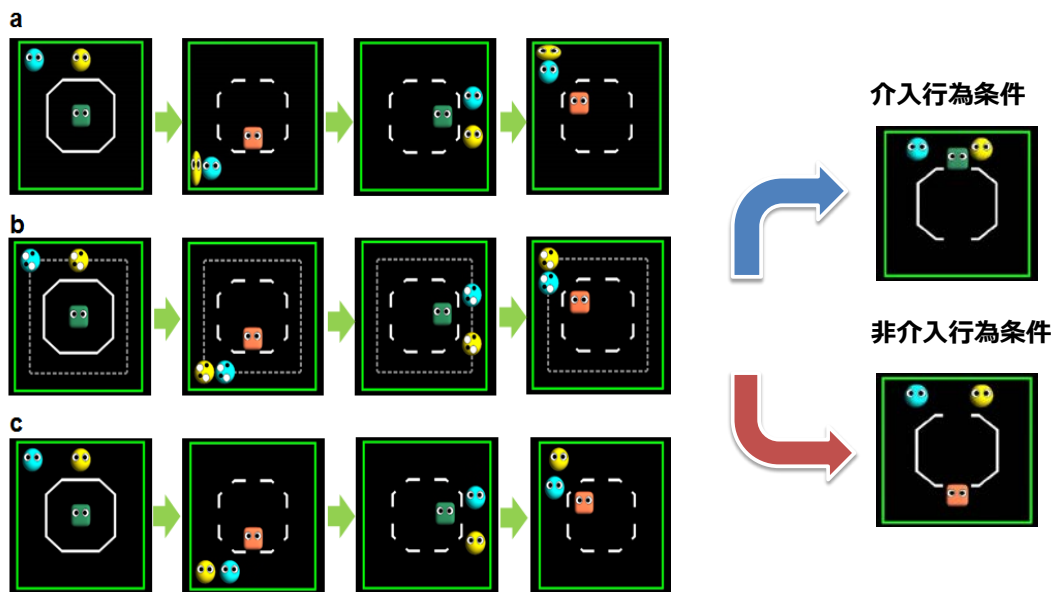


図1 (a) 攻撃相互作用（水色と黄色の球体）を観察する二つの四角のエージェント（緑とオレンジ）、
(b)無生物の相互作用、(c)中立的相互作用。

3. 波及効果、今後の予定

攻撃されている他者のために、その身を投げ出して助けるような行為は、一般的には正義の行いとみなされ、古くは神話に、現代では本や映画などによく見受けられます。そして、子どもだけでなく大人もそういった行動が描かれているヒーロー映画に熱狂します。なぜ我々はそのような行いや物語に魅了されるのでしょうか？我々の研究結果は、そういった正義への憧憬が、ヒトに生来的に備わった性質である可能性を示しています。つまり、正義を肯定する本性をもつがゆえに、我々は「強きを挫き、弱きを助ける」正義の味方に魅了されるのかもしれない。

今後は、本研究で示された発達初期の正義を肯定する傾向が、(1) どのような要因によって発達するのか（遺伝や環境要因の特定）、(2) その後発達する、より高次の正義感とどのような関係にあるのか、を解明していくことが必要です。これらの問題を科学的に検証することは、現代社会が喫緊に取り組むべき社会的課題であるいじめの本質的な理解とその解決に向けた議論につながると期待されます。

4. 研究プロジェクトについて

本研究は、以下の支援を受けました。

①文科省科研費新学術領域（No. 24119005、代表：明和政子）

②前川報恩会 (明和政子)

③科学技術振興機構 CREST (代表：開一夫)

④文科省科研費新学術領域 (No. 16H01482, 代表：開一夫)

<論文タイトルと著者>

タイトル：Preverbal infants affirm third-party interventions that protect victims from aggressors

著者：Yasuhiro Kanakogi, Yasuyuki Inoue, Goh Matsuda, David Butler, Kazuo Hiraki,
and Masako Myowa-Yamakoshi

掲載誌：Nature Human Behaviour